

2025年春 私のバリ山行2題

(報告) AH

第171回(2024年上半期)芥川賞受賞作、松永K三蔵著「バリ山行」を読んでみた。山を齧った者ならバリ山行とはバリエーション山行の略であり、通常の登山道ではなく廃道や難易度の高いルートに行く山登りの事と分る筈だが、選考委員9名の顔ぶれを見ると山には縁がなさそうで、まずはこの題名が委員の先生方の気を惹き、読んでみるとなかなか面白いとあって受賞に結びついたのではと推測する。著者の作戦勝ちってところか。

関西に疎い当方、六甲の名前は聞いたことはあっても、神戸市の裏山位の知識のみ、意外に奥が深いようだが、まあ遭えて関東くんだりから出かけるほどの事もあるまいと近場で試みてきた。バリ山行もピンからキリまであり、その究極のピンは平出和也、中島建郎両氏のK2西壁であり、こちらはしょうもないキリの方の2例であります。

1. 沼田市・高戸谷山 1073m

◎日時：4月16日(水) ◎同行者：妻

1992年5月第1号が発刊された白山書房の季刊「山の本」は、誠に残念ながら2023年3月の第123号(2023年春号)をもって休刊となった。比較される事が多かった「アルプ」が25年間だった事を思えば、31年間もよく頑張ったもので、昨年春から遅々として進まずながら暇に任せて第1号から読み返している。気になったのが10数年前から群馬県内の知られざる山々を紹介する沼田市在住のG氏の投稿で、とりわけ吹割の滝裏に聳える高戸谷山に興味を惹かれた。1万3千山収録という「コンサイス日本山名辞典」にも1万8千山収録武内正編集「日本山名総覧」にもその名は記載なく国土地理院の2万5千図「追貝」に1073mと記されているピーク、これはちょっと面白そうと出かける事にした。

まずはG氏の紀行文を参考に吹割大橋手前の市営駐車場に車を止め、2人ともピン付き長靴で左手十二山神の赤鳥居から吹割の滝遊歩道を辿る。すぐに第三観瀑台となり、見下ろす吹割の滝は雪解け水を集めて轟音立ててなかなかの迫力だ。地元では観光宣伝で「東洋のナイアガラ」と称し、そりゃないぜと思っていたものだが、初めてこの時期に訪ねてみてその水量の多さを見直した。第一観瀑台の先で遊歩道と山道への分岐となったが、赤テープ等無い入口は倒木が道を塞ぎ人が入ったような形跡はなく、足を踏み出すのが躊躇われる。恐らく私たちが今年初めての入山者なのかも。雪の消えた山道は小枝が散乱し、倒木の先に又倒木としばし行手を遮るものの意外に広く緩い登りが続き、林業が盛んだった昭和40年代までの仕事道のような。間もなくして左手の立木に錆付いた標識が目に入り、文字は読めないがこの辺かと思極めて尾



遊歩道より吹割の滝



倒木の山道

根に取りつく。かすかな踏み跡を拾いながらの斜度35度を越す急登が続き、時に這いつくばり、次いで立木にすがりつきと息を切らす。まあ覚悟の上ではあったものの、ここが正規の辿るべき登山道であるのかどうかは判然とせず、まさにバリ山行これにありの思い。時期的に下草が育つ前で藪漕ぎがないだけ助かるものの、ともかくキツイ上り。しばらく行くと木材運搬にでも使ったのか太めのケーブルワイヤーが放置されていて、ここでようやくまずはこのルートで良かったかとひと安心する。そんなこんなで出発してから2時間45分で雑木の中の高戸谷山頂上に着いた。G氏は1時間半程と云うが、この差や如何？ 山名の書かれた小さなプレートがあるだけで、眺望もない頂上は静かだがなんかうら寂しい。地図に名もないマイナーな山はまあこんなものか。



錆ついた標識あり。ここから尾根に



高戸谷山頂上標識

下山はG氏に従い天狗山へ向かうも、見下ろす吹割の滝に誘われて尾根を取り違えてしまい、まったく別ルート、これぞバリ山行と樹林帯の中の窪地を駆け下り着いてみると遊歩道から登山道への分岐のこの日の出発地点であった。想定していたよりもずっと左寄りとなっていてびっくり、難聴の自分にも分る位な滝の轟音に導かれての事で、これは怪我の功名、天気良かったからこそであり、危ない、危ない、バリ山行は危ない。

《コースタイム》市営駐車場 8:30⇒9:00 遊歩道分岐⇒11:15 高戸谷山 11:20⇒
12:40 遊歩道⇒13:05 市営駐車場

★ 眺望得られず疲労の割には達成感希薄、あまり推奨出来る山ではなかった。

2. 上越市・青田南葉山 949m

◎日時：5月8日（木） ◎同行者：妻

会員のWSさんから「いいキャンプ場ですよ」勧められた。妙高高原は何回か訪れた事あり、妙高山にも2度登ったが、その先となると未知の地、青田南葉山なんて初めてだが、興味深々、来年は免許証期限切れ、これがラストチャンスと重い腰をあげた。

WSさんは毎年5月の連休に出かけているようで、連絡すると今年は4日にトライしたが雪が多くて登山口の沢が雪のブリッジが崩れそうで渡れなかったという。2週間位先の方が宜しいのではとアドバイスを受けたが、まあキャンプ場も予約したし、天気も良さそうだから出たとこ勝負でと決行する。

自宅を5時前に出発。4時間半ほどで南葉高原キャンプ場到着。背後の南葉山にはまだたっぷり雪が残っていて、久しぶりの雪山に気が逸る。こちらはピン付き長靴、相棒は先日の高戸谷山で長靴が破損してしまった為、チェーンスパイクをザックに木落坂コースへ。歩き始めてすぐに小さな沢を渡るがWSさんがスノーブリッジ崩れそうと言う箇所はここに違いない。小さな橋が架かっている4日間で急速に雪解けが進んでいる事が分る。

先行者がいるようで、橋を渡ってすぐに右の雪渓に新しい踏み跡があり、相棒はここでチェーンスパイクを装着し迷わずその跡を追ったが、ものの10分もせず同年輩の男性が1人下ってきて「雪が深くてとても登れない」と云う。頼りにしてきたこちらは、ありゃ！と当てが外れてガッカリだったが、よく見るとこの連休で歩いた人がいたようで古い踏み跡らしきものがあり、そのまま雪渓を詰めることにした。



キャンプ場より望む青田南葉山

連休後雨がありトレースは甚だ不明瞭、長靴蹴りこみルートを決めて後を追わせたが、次第に傾斜が急になり斜度35度以上はあろうかという急登では、スリップする場面も出る始末、たまたま左手の樹林帯へ逃げ込み、よく探すと立木に古びた赤ペンキの〇印を発見、夏道に出たようでやれやれだった。今日も又バリ山行かと自嘲しきりで、その内一人中年男性が下ってきて「もうすぐ七合目ですよ」と激励された。今日出会った2人目の彼に勇気をもらい、12時丁度展望広場と称する七合目に到着。



雪渓上部でスリップ



登山口の小沢 4日前はスノーブリッジで渡れなかった

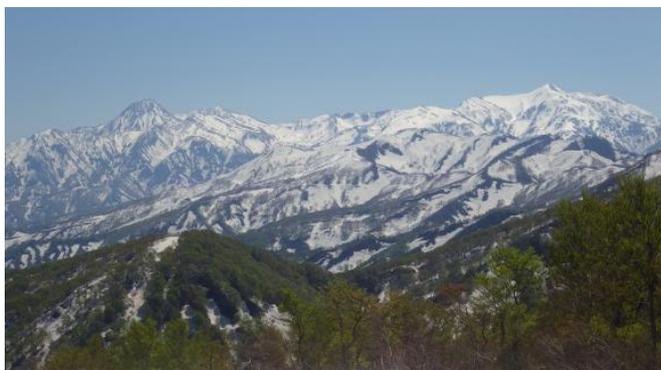
夏道なら登山口から1時間とあるが、なんと2時間20分もかかってしまい、どうしようか考えたが、もう2度と来ることはないし、いい天気だしと前進する。が、ここでまたもや大失敗。手にしたガイド本では七合目の先は30分程平坦な道を進むとあり、直進したのだが、実は左折しなければならなかったのだ。

踏み跡も消え、赤テープも〇印もなく、スマホアプリ勉強中の相棒も頭をひねっていて、どうもおかしいので引き返し〇印や赤テープを探し、探しして見晴台から30分というところを1時間25分もかかってようやく真っ白な青田南葉山に立った。



青田南葉山頂上

山頂は深い雪に覆われ、標柱はもとより祠も鳥居も雪の下で頂上の証拠を示すものは何もないがまず間違いはないだろう。夏なら灌木に囲まれ展望は利かないらしいが、その灌木も雪の下とあり、積雪はまだ3㍍以上ある事が窺える。頸城山群の妙高-火打が指呼の間、しばし目の保養を愉しむ。キツイ思いをしたからこそのご褒美、夏だとこれが見えないとあれば、今こそこの山の登山適期なのではなかろうか。



山頂より望む妙高山（左）と火打山（右）



テント前から望む日の出 左のピークは米山

下りは夏道に沿って慎重に先客の踏み跡を拾ったが、これもかなりしんどかった。下るにつれ雪の重みで垂れ下がった木の枝が幾重にも重なり前進を阻み、時には枝が跳ね上がったりともうバテバテ、車に戻るとバタンキュー、缶ビールを手にもたもたとテントを設営した。図らずもルート探しのバリ山行となり、草臥れたが記憶に残るいい山だった。

南葉高原キャンプ場は南葉山の中腹に設けられ、傾斜地なので段々畑の要領で区画は段が刻まれ、ドコモカタクリのピンクに染まっていて心地よい。背後は南葉山に遮られているが前方は240度の広がり、眼下左手に遠く佐渡島を望む日本海、柏崎方面頸城平野と越後の名山・米山、さらに目を転じていくと右手には越後三山、魚沼の山々とその開放感こそ、このキャンプ場のセールスポイント、守門岳上空から昇ってくる日の出を見ながら、場内で摘むフキノトウも忘れがたい。一段上のソロの男性、テントの前にタープを張り、椅子に座って身じろぎもせず3時間程、黙ってひとり眺望をお愉しみで、声かけるのも憚るほど、その気持ちなんとなく分る気がした。

《コースタイム》登山口9:40⇒12:00七合目⇒13:25南葉山13:40⇒14:00七合目⇒15:10登山口